

編集後記

私たち社会学スタッフの文学部所属の最後の年、2009年の終わりに、柴田先生(社会学)・中沢先生(心理学)のお二人が中心となって、新学部紀要の内規や執筆・編集規則等をまとめていただきました。その後、年度末から新年度にかけては、新学部用校舎改修にともなう引っ越し作業が続くなど、新学部発足の慌ただしさを経て、やっと夏休み後半くらいから本巻の具体的な編集作業がスタートしました。社会学篇は、私が編集主幹に、それに川上周三先生、永野由紀子先生のお二人にガッチリ編集委員会体制を組んでいただき、万全のスタートを切れたと思います。しかしながら新刊ですので、まだ、その原稿を流し込むプラットフォームはありませんでした。判型の検討(A4かB5か)から始まり、紙の素材・表紙のデザイン、段組やフォント、ヘッダなどなど、一つずつ決めながらの集稿・編集開始となりました。

さてその頃、これも物事の順序としては後先になってしまったのですが、発行主体が専修大学人間科学学会と定められました。専修大学学会、専修社会学会との三択となり、大学当局との議論の結果、このように決まりました(学部紀要であるということから)。

しかしながら社会学専攻には在學生を主たる構成員とする専修社会学会があって、機関誌『専修社会学』が現存します。したがって文学部人文学科社会学専攻の學生が在籍する

平成24年度までは、本誌と『専修社会学』が並行して刊行されることとなります。

また、本号の編集がスタートした秋になって、大学内部で専修大学学術機関リポジトリ運用開始のためのシステム作りが始められ、本誌もそこに登録されることになりましたので、こうした電子資料としての知的生産物の位置づけについて内規に条項を設ける必要が生じて来ました。昨年度末に作られてはいた内規は、実質的には上述のように集稿・編集作業がスタートしていたことで機能しはじめていたのですが、こうした経緯から文言の固まるのに時間を要し、結局、新学部発足年度末の教授会でやっと初めての承認を得ることとなりました。

このような不確かな段取りの中にも関わらず、快く・正確に論攷をお届けいただきたい執筆者の皆さまにこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。創刊記念号ということで、実に多くのご投稿をいただきました。

また、新学部紀要創刊に向けて次から次へとこなさなければならぬ仕事を手際よく差配していただき、一冊としてまとめあげてくれた専修大学出版局の川上文雄さんに厚くお礼を申し上げます。

慌ただしくやっと創刊号ができあがりました。次号からは爾々と、落ち着いて編集作業に取りかかれるよう、体制整備を進めて参りたいと思います。皆様、ご協力をよろしく願ひ申し上げます。
(大矢根)